

NPO支援：資金助成に合わせて活動支援を  
コミュニティケア活動支援センター事務局長 佐藤修

この三年、NPO(市民団体)への資金助成プログラムの企画運営に取り組んできた。NPOへの資金助成プログラムは最近増えてきているが、その基本的な進め方に疑問があったため、新しい支援の枠組みを構築したいと思ったからである。幸いに主旨に共感し、支援してくれる財団に支えられて、自由な発想で異色のプログラムを開発することができた。共創型相互支援の輪づくりを目指すコミュニティケア活動(コムケア活動)プログラムである。

これまでのプログラムへの「疑問」とは、「資金提供だけでいいのか」ということである。たしかに資金は市民活動にとっても重要な資源であり、資金を必要としているNPOは多い。しかし、資金をもらってもそれを効果的に使えるかどうかが問題である。安直に資金を支援してもらうことで、助成金への依存体質を助長している状況もないわけではない。そもそも市民活動には、経済至上主義からの脱却という側面があると思うが、そうであれば資金助成は手段でしかない。しかも「危険な手段」と言ってもいい。

そこで、このプログラムでは、単なる資金助成ではなく、応募した市民団体と一緒にあって、お互いに支援しあえる関係を育てていくことを目指すことにした。応募団体に対しては、資金助成とは別に、なんでも相談に応じることにした。といっても、事務局がすべての相談に応じることは不可能である。そこで、応募団体にも他の団体に提供できるノウハウなどを公開してもらうことにした。

資金助成は、そうした関係を育てるための手段と位置づけた。したがって助成先の選考に関しても、応募団体が積極的に参加できるようにした。たとえば最終選考会は公開にし、応募団体も投票に参加してもらっている。それによって、自分たちの活動を相対化し、違った分野の活動との接点を発見してもらうことが可能になる。昨年の選考会には、企業や行政の関係者も含め、二百人を超える参加者があり、交流会も盛り上がった。

応募団体相互の横のつながりも重視しており、サロンや交流会、メーリングリストなど、さまざまなふれあいの場を育ててきている。6月には、ブース出店やワークショップ、ミニイベントを混ぜ合わせたバザール型公開フォーラムを開催した。参加者も二百人を超え、そこから分野を超えたNPOのつながりも育ちはじめている。

こうした活動を通して、しっかりと地に足つけた市民活動の頼もしさを実感してきたが、その一方で、急速に増加しているNPO法人の動きへの危うさも見えてきた。そして、安直な資金助成の危険性を改めて実感している。

日本の市民活動はいま、これまでの社会のサブシステムに閉じ込められるか、あるいは新しい社会の枠組みを生み出す起爆剤になるかの岐路にあるように思われる。これまでのような経済主義や分業発想の延長ではない、新しい支援の思想が必要である。

彼らにいま、最も必要なのは資金ではなく、資金を集め資金を活かす「知恵」と活動を進化させるための分野を超えた「仲間とのつながり」である。残念ながら、多くの支援プログラムは、資金は提供するが、そうしたことへの支援は用意されていない。そろそろ資金助成だけのプログラムは見直されるべきではないか。

今年の公開選考会は10月10日に開催される。このプログラムをさらに一歩進めていく予定である。新しい支援プログラムに関心のある方の参加をぜひお勧めしたい。